

九州大学萩野文庫蔵『成島信遍集』：翻刻と解題

久保田，啓一
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/10485>

出版情報：文献探究. 13, pp.17-29, 1983-12-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

九州大学『成島信遍集』
萩野文庵蔵

— 翻刻と解題 —

久保田啓一

凡例

- 一 漢字・仮名ともに現行のものを使用した。ただし、「尸」「馬」など元の形を残したものもある。
- 一 本文中の「ハ」「ミ」はすべて「は」「み」に改めた。
- 一 丁移りは(一オ)の如く示した。
- 一 見消は原本通りに再現し、訂正前、訂正後の本文を提示した。
- 一 判読不能の箇所は□で示し、推読した文字はその中に入れた。
- 一 本文の疑問箇所には(ママ)と傍書した。
- 一 序跋を除く和歌に通し番号を付した。

成島信遍集 (表紙 打付書)

是は為村卿より門下の人々に百首はかり故大納言との御点の歌かきてまいらせよと侍し信遍三世の恩波に浴して点のうた二三千首に及へり点取のうた斗二百首斗には趣侍りししこれを書てたてまつりし草稿なり

(白紙)

(一オ)

三世のなみ

三代御点詠草にそへて奉しことは

敷しまの道のしるへき冷泉家にあふき奉しはしめは享保四とせのことにしていまよりは二十とせあまり七とせのしくれふりゆくむかしなりきかくてそ時うつり事さり世中あらたまりて身を老ぬあはれ古を思ひ出て賤のをたまきくりことをするもいとものくるをししく蚤のさえつりよそのみるめさすかにかたはらいたきもの□□むねにも

みぢはらのふくれぬるにそけすしうようるなきさまなること、もやむことなきおはんわたりにも聞えあけなんはおこにけうさくなる物とやみそなはしたてまつらんかしされと人の下なるきは、草葉の露むきかたなこなたにか、つらふなとた、よふ雲の跡□と、めずいさ、か時にあひめくみをうけ身のさきはへこ、ろの(二オ)よろこびをも誰かはつたへいつれかさることありとも聞えなましさても四十はかりの昔故殿いますかりてまたわかうわたらせ給ひしほとにや夏歎といふことをよませ給ひし

ともしきす賤に此ころきかせはやいまこむ秋のさおしかのこゑかけし思ひは無量かふとかや佛のみのりにもとかせ給ふるとなんそのころいさ、かすける志ありていかてかゝるおほむこのはうけ給はり傳ることよと山の井の浅き心にしみ夢現にもつとそひぬ伊勢のうみ蜚の舟なかつたるけによるへなきをなけき谷の埋木かくてやはた、に朽ぬへきと獨こつさおなしつらなるは山賤の花の陰にやとり浦はの蜚の月をみるよとろころとしてつきしうふかくてそしりは朝な夕なにつとひたれとけすのきはにしてさて(二ウ)のみすくしたるにはかろぬ事にて殿のうちに聞えぬその折しもかの御おやにあたらせ給ふかおほやけの御ことにて東の旅にもせ給ふほど冷泉のきませるをなとせるへやたのまさるわたくしの事のみにもあらしとみにこの給はさす藤咲門の御ゆかりいともかしこし津の国の難波の事をさしきてまかてぬやかて殿上の間にめしいて、高家の人、しか、のよしを啓し万の事ねきつるま、にやりぬしかありしより雲

路の尸の朔に秋の露浅からぬ光をうつしよもきかもこの根さしに夏
 草のしけきおもひをのふしかるをおもひもかけぬ事にてうせさせ給
 小月日の鼠かつらをうしなひ浦はの蜚の袖しほたるれとせんすへな
 し故との御わたりにうちつき(三才)て浪のめくみをかけ給はせ
 おはしますこと、なりぬ扱傳奏うけ給はうせ給ひて年ごとに雲井の
 月のかつらとよち花のむしろに雨のめくみをしく小倉の山ちあとは
 るかに河上のいつもの花のと思ひわたりしをつゆ雷のよとおとろく
 ここの侍りしや言の葉もたえてや□しわかぬ御ひかり消てかひなし
 今こ秋の御このはうちくへに啓して行はせ給ひめくみの波三千餘
 首をひめをくのみそ只かのおほんなこりなるへきこし延享三年時
 鳥五月待ほとおほんあとにあたらせ給ふか御下向ましくける次お
 もほし立ぬるよしにて三世の波かせさせ給ふもくつともかきつめて
 奉れと人なみにうけ給はるこそ謙ならぬすくせなれつゝる物の始の
 事とも(三ウ)秋のよの長さおもひを春の草つかみしかき筆にかね
 つゝぬるははかりあれと一たひはおそれみひと度はよろこひ百首
 ニつ斗にそへて三世のなみと題しかの御家に奉りぬるものならし
 なからへてあふくもうれし三よの波あまのもくすにかゝる患を
 延享丙寅の秋八月 源信遍 (四才)

三世のなみ 為綱卿御點

立春

1 若草も生さきこもる春の色をけさよりしるきむさしのゝ原

初春祝君

2 我君の春も千とせの始とやのとかにきなくけさのうくひす

逸峰帯晚霞

3 なかめやる峰もかすみにもり江の初瀬のひはら色そ暮ゆく

南北梅

4 江の南先咲梅も春の日のめくらぬかたや雪におくる、

春雨

5 此朝け立るけふりも色わかつて雨にかすめる里の一むら(四ウ)

春夕雨

6 忍ふ草露をそへすは暮深くかすむ軒はの雨はしうれし

幽栖春日

7 かすむ夜に軒もる月の哀さも獨かためのよもき小の月

草漸青

8 若草の目をへて青む此ころやこにも苑の春をしるらん

山路尋花

9 分来つる山も幾重そ咲花の傍まかふ雲をしるへに

曙山桜

10 有明の月も霞て咲はなに哀をそふる三吉のゝ山 (五才)

夏

首夏

11 今朝ははや夏来てそよくなうのはの緑の梢みるに涼しき

更衣

12 おしむそよ花そめ衣夏きてはかふる心を世にならひても

郭公

13 時鳥思ひぬにみし夢よりも弥はかなる夜はの一聲

待郭公

14 つれなくて日数へにけりほとゝきす待し心もよはる斗に

雲外郭公

15 時鳥そこともいまや白雲のよそに過行夕暮の声

卯月郭公

16 百千返はや鳴わたる時鳥あすのあやめのねをもおしまて

(五ウ)

浦夏月

17 難波江やあしのよわたる浦かせに夏ともわかぬ月の涼しき

叢螢

18 夏草のしげき思ひを誰みよと夜はに螢のもえて行らん

六月萩

19 麻のはの夕してかけてみそき河流るゝ波に夏もとまらす

秋

中秋月

20 よしや人老となることもこよひみのめてすや月の秋のなかはに

秋夜長

21 老らくのぬぬ夜はいかに菅のぬの長きをかこつ秋の枕に

野分

22 吹しほる夜はの野分のはけしさをけさ跡みする秋の花園

瀧紅葉

23 音羽山木ミのもみちは色そめて時雨にのこる瀧のしる糸

紅葉如酔

24 山姫のえひをすゝむる色ならし紅心かき鏡のもみちは

秋欲暮

25 朝露もいっしか霜に置かはる秋の末のゝ色そみにしむ(六ウ)

冬

依雪待人

26 来てもとへよのまの雪も深き江に舟さしかへる人にならうて

閑路雪

27 秋かせのふくに都をわかれきてこゆれば雪の白川の閑

恋

共忍恋

28 いつまでか下にこかれん諸ともに忍ぶの浦の蜃のたくひは

忍経年恋

29 誰にまた袖のしくれもしらるへき忍ぶの山に年をふる身は

欲志恋

30 後いかにうつろひはてんうき人の心の花に風もこそふけ

三年不見書

31 かきなかす言のはもなし溝水三たひ紅葉の秋はふれとも

寄鳥恋

32 山鳥の尾上へたてゝいつまでもつれなき中に音をもなまし

寄鏡恋

33 傍にたつも心のまよひとはひとりかゝみにむかひてそしる

雑

竹不改色

34 直なる心よりこそ呉竹のよゝにみさほの色はかはらぬ

竹逕通幽處

35 呉竹のよきをへたてたる住居かな苔の通路跡たゆるまで

秋懐旧

36 名のみたゝのこるもかなし諸共にみしよの月の秋のとも人

仰により殿上の間にして御門下になし給はりける時追

つきて奉りし

37 こののはの露をも玉にみかゝはや雲井の月のひかりまちえて

為久御御點

三世の波

春

霞始算

38 いとはやも立そめけりなさほ姫の霞のころも春の山かせ

早春鶯

39 春日のゝ雪まの草の音になくもまたはつかなる春の鶯

初春鶯

40 浅みとり春をつくるも初草のまたうらわかき鶯のこゑ

野外朝鶯

41 朝日さす影ものときき春のゝにさそはれ出て鶯のなく

松間鶯

42 うつりきて今一しほの春の色を松にそへたる鶯のこゑ(ハウ)

山家鶯

43 世の春に出て鳴音は山任の心もしうぬ谷のうくひす

名所鶯

44 萬代となれも初音によはふうし三笠の山の春の鶯

沢若菜

45 水ぬるむ沢邊の春に乙女子か心もとけてわかなつむらし

夕梅

46 雪も未のころかきほの夕まくれ色こそみえぬ匂ふ梅かえ

庵春雨

47 ふるほとも世にしうれぬや庵しめてすむ身にゝたる春雨の空

春草

48 春の色をそれかとみるも浅ちふの□はにまじる春の若草(九才)

春江月

49 光そふ秋をもとはし五つしま入江の春にかすむよの月

桜

50 たかせにかならひそめけん花桜色かに人のあかぬこゝろは

花

51 雲うつむ尾上のかねもかほる也花の木間をもる響に

尋花

52 けふもまたかゝる心を枝おりにて分はや花に峰の白雲

山花

53 思ひ入心そしおり春の山おくあるはなも猶たつねみん

逸見山花

54 雲とのみ見しはそらめの桜花はるかにかほる春の山かせ(九ウ)

社頭花

55 小塩山神代の桜咲にけり幾春かゝる花のゆふして

落花

56 散うつむ苔のみとりを吹分て風も跡ある花の白雪

庭落花

57 盛にと契し人の音信もあらしの庭の花そちりゆく

苗代

58 ひかれてはいかなるかたにわ□□うんはしろ水も人のこゝろも

藤

59 咲かゝる松のうへこす春風に音をそへたる岸の藤浪

朝藤花

60 紫もけさ色ふかし藤の花よのまの雨の露やそめけん (十才)

池藤

61 池にすむおしのつはさのむらさきも色をかはしてうつる藤浪

松添春色

62 言のはの上にもならへ浅みとり春に色そふ松の一しほ

春風

63 佐保姫の霞の袖に吹そめて木めをいそく春の山かせ

春夜

64 ねもやうてむかしの春そしのはる、梅かゝかよふよはのまくらに

春野

65 むさしのや春の日かけの行えさへかきりしられすかすむ融ヤ

春浦

66 沖つかせ春は梢に吹たてて松原かすむ任吉のうら (十ウ)

春歌

67 立出る心もさそないさむらん雲井の庭の春の白馬

春床

68 月もしれかたしきなれてかすむよの哀教そ小春の夜床を

春船

69 河かせも長閑き春にさす棹の袖さむからてうたふ舟人

暮春浦

70 浦人にとふも行急はしる浪のいつくか春のとまりなるらん

(十一オ)

夏

更衣

71 いさわれも時にうつるを心にて花のかとりの衣かへてむ

朝更衣

72 玉てはこあくればかへて夜衣きのふの花のうつりかもなし

夕卯花

73 月はまたさすかけうとき夕暮の垣ぬさやかに咲るうのはな

郭公

よろしく候

74 一聲を夢にやなさん時鳥待夜の月にをきるさりせは

75 時鳥思ひはつへき初ぬかはなと侍人につれなかるらん

聞郭公

76 立帰り又やきなくと時鳥ほのかに聞し夜社わられぬなれも五月の雨になくこゑ(十一ウ)

晚郭公

77 時鳥きなくもしる蜘蛛のかゝる軒はの夕くれの声

五月郭公

78 おり出てけさ里わかぬ時鳥なれも五月の雨になく声

故郷郭公

79 古をなれもやしのふ時鳥ならのみやこにおちかへりなく

郭公遍

80 里わかつて今そかたらふ時鳥なれも五月の空やまちけん

五月雨

81 陰高き野沢のあしもみこもりになひきふしたる五月雨の叱

夏月

82 影うつる板井の清水結ふ手にやとりもはてぬ夏のよの月

(十二オ)

83 涼しさは秋とやいはん吹かせも袂にやとす夏のよの月

蚊遣火

84 賤かすむふせ屋にくゆる蚊遣火の下やすからぬ世をすこすかな

照射

85 陰ふかきは山の松のこかくれに月をもしうてともしさをらん

峰照射

86 ますらわかいかに侘てか峰高み暗ぬ雲井にともしさをらん

螢火透簾

87 こすのこにみるも涼しき影なれやふかれてくる風の螢は

月前納涼

88 たとふへき扇はをきて夏のよの月を袂にふらす涼しき(十二ウ)

夏山朝

89 柴のとはまた宵なから一声にあくる軒はの山ほととぎす

秋

河初秋

90 夏衣きのふにかはる涼しさやをみの小河の秋のはつかせ

七夕

91 たなはたのかけし契や昔□なるその世もしらぬ天の河なみ

残暑

92 御萩せし夏は昨日の河なみにいかて暑の立かへりけむ
93 秋もまた麻の小衣吹かせのきのふにかはる涼しさもなし

萩露

(十三才)

94 朝な／＼なしく白露の咲花の色になりゆくへの萩はら

薄似袖

95 山のはの夕日をまねく袂かすとすその、尾花秋かせそ吹

江上月

96 満汐にた、よふ影も住の江やみるめことなる秋のよの月

97 蜃人も舟さし捨て月ひとり入江に更る影の淋しさ

松月幽

98 雲なうて風をもまたむ松のはに影もるよはの月そすくなき、

田家月

99 もる月の光も賤か身にやしむ秋のよ寒の小田のかり庵

葉中月

宜候

100 其名さへ雲井と聞は及なき御階の月よいかにすむらん(十三才)

洞庭秋月

101 又たくひなみのみるめや澄月の氷をた、む秋のうらかせ

月前虫

102 月かけはさせともうとき草のこに獨さやけき松むしの声

月前菊

103 一きわの光を花にさしそへて月も匂へる露のしう菊

月前幽情

御禰美あり

104 くもりなき月にも袖はしくれけりみぬよの秋をかくる泪に

曉霧

105 山のはにかたふく月を立こめてのこる夜深き秋霧の空

夕鹿

106 真萩原夕の露をさおしかの泪にそへて妻やとふるん(十四才)

深夜虫

107 更てこそ哀もまされ秋のよの長をかこつむしのおもひも

秋夕

108 真萩原虫のうらみもよき秋の末はにかはる夕暮の声

曉秋風

109 淋しさも暁ことに聞そへぬ秋ふかくなる秋のうは風

沢畔鳴

110 たれかきくよるの沢田にすむ水の哀もふかき鴨のはね揺

搗衣

111 打そふる恨もさそなき重ね妻まついもか関のきぬたは

月下搗衣

宜候

112 秋もや、夜寒の月の色そへてたか白たへの衣うつらん(十四才)

紅葉

113 里はまたしくれぬ比に色つくや露のそめたるもみちならん

朝紅葉

114 一入は時雨もしろぬ色なれや朝日にそむる峰のもみちは

秋朝

115 吹かせもけさより秋と白菅のまの、かや原露そみたる、

秋植物

116 露時雨そむるは同じ秋になと木はの色の千種なるらん

冬

117 散つもる落葉を更に吹立て又声さはく庭の木枯 (十五才)

落葉風

118 人めさへ秋より後はをく霜にかれのみまさる浅ちふの庭

閑庭霜

119 時雨つる跡の雪もおく山の松葉にこほる冬のよの月

山寒月

- 120 旅宿冬月
夜はの月かりねともなへさゆるよの袖の氷にあひやとりして
浦千鳥
- 121 おりみるも又さそはるゝ友千鳥浪のいつくに浦つたふらん
江寒芦
- 122 難波江や蜚のたく火も影寒みあしよのことに隙そゝひ行
椎柴
- 123 槇のはゝあらそひかぬる時雨にも猶色かえぬ峰の椎柴(十五ウ)
- 124 つもるより夫ともわかす年寒き雪の下なる松のみさほは
雪埋松
- 125 薄暮雪
埋れぬ夕の鐘の音はしておのへのくもにふれる白雪
- 126 朽のこる尾花も雪にうつもれてまねく袖なきまのゝ浦かせ
浦雪
海邊雪
- 127 浪こゆる佛なれや浦かせに雪吹こほつ末のまつ山
冬山暁
- 128 暁の山かせ寒し猿さけふ尾上の霜に月をのこして
冬夕
- 129 夕嵐入日を雲に吹とちて雪けの空そまた暮行 (十六オ)
- 130 冬磯
月雪の筆のすさみも限あれや繪鳥かいその冬の明仄
冬枕
- 131 槇のこや嵐風音さむき霜よの枕いかにあかさむ
冬動物
- 132 暮ふかき雪のふる江に声せすはむれみる鷺をそれとみましや
歳暮梅
- 133 雪ふかき年のこなたに梅はまつ咲いてゝ花の春いそくらし
恋
尋縁恋
- 134 道芝の露のゆかりもとひよらんおもひ置てし宿のしるへに
春夜忍恋 (十六ウ)
- 135 よしや又朧月夜はまきはす袖の涙もたよりありけり
厭忍恋
- 136 つゝむにそうきも増るを何とかく洩しかねたる心なるらん
契恋
- 137 偽のあらはある世になしはてゝ人の言のはよしやたのまむ
祈恋
- 138 わか思ひうきたの森のゆふたすきかけし祈りのしるしたにあれ
祈身恋
- 139 神よしれおしからぬみもおしまれてあふにかへむといのる心を
祈神恋
- 140 としをへて祈るしるしもなき中はつらき人にや神もならひし
祈空恋 (十七オ)
- 141 いのるにもつれなき神のみしめ縄いかなる筋に引たかふらん
逢不遇恋
- 142 とけてねし一よの霜の笹まくらつれなき色になとかへるらん
後朝恋
よろしく候
- 143 かへりきて書やる文も契とは定めぬ筆にこの葉そなき
惜暁恋
- 144 うき影のわすれかたみや別こし名残のそでの晨明の月
鐘はまた聞えぬよはの手枕に別をいそく鳥かねそうき
- 145

難恋

146 うき人をいつかわすれん忘草種とる道もまたしうぬみに

春恋

(十七ウ)

147 雪もまた消ぬ春の思ひ草もえては人にいつかみゆへき

夏恋

148 夫としれ思ふ思ひは下草に秋まつむしのねにたてすとも

旅宿恋

149 別こし都に思ふ人なくはうき旅ねにも夢やむすはん

150 みせはやな旅ねの床の思ひぬにしほりそへたる露のたもとを

被厭恋

151 等閑に思はんみをもかすまへていとふ心はたのみこそあれ

顕恋

152 吹かへすならひもあれな秋風の初はなすきほに出し名を

変恋

宜候

153 他なりと言し心の色なからうつれは更におとろかれぬる(十八オ)

稀恋

154 万代をたもたんみかは何にかく浮木のかめのまれのちきりそ

疎恋

155 ほし侘ぬ浪のみるめもうと濱のうときにつけてぬる、袂は

恨恋

156 思へ人つもりむ後はたか身にか吹かへるへき葛のうらかせ

恨身恋

157 教ならぬみをこそなけきをとしめていとふも人になにかうらむ

寄雲恋

158 あくかれて物をそおもふ逢事は中空速き雲のへたてに

寄霞恋

159 霞さへつらき心にならへはや思ふあたりをちへたつらん(十九イ)

寄山恋

めつらしく候

160 うき中に鏡の山をえてしかな末のちきりもかぬてみるへく

寄柱恋

161 ちうすなよつむにあまる心よりいはせの森の露のここのは

162 つれもなき心の色はもみちせぬときはの森の名にやならひし

寄浦恋

163 よしやそのみるめもかすまへていたつらにいくとせかくる袖の浦浪

寄松恋

164 いつまでとつれなかるらん色かへぬ松もちとせのかきりこそあれ

寄草恋

165 みを秋の末の風のみくす原かれてもかれぬ恨こそへ

寄繪恋

珍重候

166 しけりそふ思ひの種となりけり草のはつかにみてし悌(十九オ)

寄書恋

167 言のはもかはさぬ中はうつし字に心をよする類ひにそうき

寄書恋

168 水差の跡のうき名をいとふと思ふほとをばかきもなかせす

寄鐘恋

宜候

169 高砂の尾上のかぬもかひそなき契らぬ暮をいそく響は

寄衣恋

170 色かはる言はの露の麻衣あさくは人をたのまさりしに

171 みる夢もうきをかさねて鳥羽玉の夜の衣そかへすかひなき

寄枕恋

172 なたつくす岩ほとあるを恋衣かへすそ人はつれなき

寄枕恋

173 しうれしなよるの泪の床のうみうきてなかる、枕ありとも

(十九ウ)

寄舟恋

174 風をたえ浪にたゆたふ沖つ舟何を便にいひもよるへき

寄名所恋

175 しられしと忍ぶの森にをく露の消ても誰か哀とはみむ

雑

夕風

176 タまくれ野守のかねの音そへて聞も淋しき軒の松風

閑居夜雨

177 灯のもとみし友そしのはるゝ雨しつかなる草の庵に

嶺上松

178 暮ぬまもそれとはみえず高砂の尾上にけふる松の村立(二十才)

暮山松

179 暮そむる山はひとり色そへてそれともみえぬ松の村立

名所松

180 たゝにふる身にこそはつれ高砂の松は老木も名に立る世を

海眺望

181 鷗立波はこなたにやゝ暮て夕日にのこる沖の島やま

原眺望

182 立出てみる袖寒し旅衣すそのゝ原の雪のあけほの

名所海

183 いせの海に千尋の底もしらぬみはいかゝ緒（こ）の玉も拾はむ

古寺鐘

184 暮深き雲の林に音す也嵐にたくふ入相のかね (二十ウ)

残月越関

185 残る夜の月の光に清見かた心とめてこゆる旅ひと

唐人

186 唐人のたえぬ貢の玉もいま大和しまねの光にそよる

上陽人

187 音にたてゝ我も六十の春をへぬ哀と思へみやのうくひす

釋教

188 妙なれや思ひの家を出よとてよを導し三のくるまは

神祇

189 あふかすや日よみ月よみ限なき世ゝに陰らぬ神の光を

祝

190 君安く民豊かなる時つかせ吹おさまれる御代そかしこき

社頭祝

191 瑞籬の松をたわしに君か世の千代をもまもれ佳吉の神

寄世祝

192 治れる今此時を萬代の笔のかゝみにかけてあふかむ

三世のなみ

春

193 かすむ名の閑路の鳥の声も世に明たつ春をつくる融（と）

閑路早春

194 はるの色の初山藍のすり衣ひとりほのかにかすみそぬる

早春霞

195 水かゝみうつる老木の柳かけなかるゝ春をいくよかはみし

水邊古柳

196 つみはやす露のよすかに問よらむ野守か庵もすみれ咲ころ

野萱

197 空遠くあかる雲雀も落くるや草はの床の子を思ふとて

雲雀

(二十ニオ)

夏

採早苗

198 豊なる世にこりそへて賤のおか声も賑ふ小田の若なへ

嶺照射

199 ともしせし夜はのほくしの跡なれや明てもけふる峰の松かけ

行路夕立

200 旅人のぬれこし袖にみてそしる問行里の夕立の雨

秋

老人見月

201 老てみる影そみにしむ古の空やいかはる秋の夜の月

深山見月

202 山ふかみ軒はに近き松の露月におつるもみえて淋しき

海邊月

203 心ありてやとるか月も蛭衣しほたれまさる夜はのたもとに

月前鴈

204 さやかなる外山の月に峰こえて秋かせたかくわたる鴈かね

野亭鹿

205 人けなきの原の庵鹿はたゝ籬かもとにたゝすみてなく

田家擣衣

206 小山田のかり庵寒き秋かせにたれいねかての衣をかうつ

冬

山落葉

207 吹すさむ峰の嵐に紅葉はの錦をしける冬の山みち

霜埋落葉

208 ちりしくとみし紅葉はの色かへてをく霜深き庭の通路

冬月

209 みにそしむ雪の高ねの雲間よりも影すこき冬のよの月

海邊松雪

210 松に咲花もそれかこつもる日のみるめは雪に大淀の浦

恋

冬夜恋

211 思へ人さやく霜夜の小莖にひとりかたしく袖の水を

祈不逢恋

212 誰かたの手向を神や先うけて祈るに人のつれなかるらん

道恋

213 夢ならて何をたのまん海山の千里へたゝる中の通路

寄鳥恋

214 飛つれてねにゆく鳥の契をもわかたくれにいつならはまし

雑

河水流清

215 濁なき時に逢よの名なりけり清瀧河の水のなかれは

山館竹

216 住やたれ人めまれなる山陰の庵をかみふ竹のひとむら

下和

217 石このみいひさわかれて新玉のみかゝれ出ねせをやなけし

寄草述懐

218 かしこしな垣ねかくれの小草までもらさぬ露のめくみあるよは

社頭祝

219 隔なき代々の光をやはらけて塵のみまもれいつも八重かき

社頭祝

長月十日あまり九日暁ふかき山からすさやけき月にをくれ奉しより

ははや七年の秋になん初時雨ふりにしかたをとおもひつゝくれはわか

またいとあへかなるほとにて年月をかさぬるまゝに物の心やうく

思ひしうるゝにそ伊勢のうみ千尋のそこのふかきおしへかしこかり

解題

し事ともさま／＼思ひあつめられ我たちちねのしたしくものし給ひしをなと昔おほして(二十五オ) いまさらいと露けし言の葉の露消給ひぬるのちも猶かの光はうせすなむ其影によりてこそ夕やみのたよ／＼しきもふみたかへぬ道のしるへとはなりきされは深き御めくみをうけたてまつるをなに／＼つけてかむくひはへるへきかゝるおりにそたからおほくもたらむは佛つくり僧に物ほとこし心のまゝに志をこなふへしかうやうの手向は及ぶへくもあらずまたさえあらんきは、自も誦經し(二十五ウ)文つくり心あるあたりに哀なることのはにかしこき心をへ侍るへけれこれも愚なる身におはぬえしりかへりみせうれて口をどちめぬいかてかはか／＼しからぬ事なりともしいて、心はかりの手向をせはやと思ひくしたるにいませし昔三代のめくみのなみかけさせ給ふける言の葉かきつめ給ひしをうへしてよよかの御跡にあたり給ふ和鼎のぬしのこひ給ふに夏の、鹿の(二十六オ)つかみしかき筆に春のはなのかくはしきことのはともをあさましく書なむはうたてつみ多き業なるへけれとまたいなみ侍らんもかへりてほいにやそむき侍らんかし今は文字のゆかみかたくななるもはちらはず且は我こゝろの露はかりの手向にもとをしまつきにうちむかふもうれしきものからかへす／＼つみうへけんか

和歌のうらにめくみのなみを三世かけしたまはかくも光ことなるまた類なみの玉もはあまの子の業にかくへきものとしもなし

源勝雄しるす

(二十七オ)

九州大学附属図書館萩野文庫蔵『成島信遍集』は半紙本(三七×一六七)一冊の写本、全二十七丁。表表紙は白地に紺の檜垣風模様、裏表紙は同じく白地に紺の蕙唐草模様をあしらう。表表紙中央左寄りに題簽剥落の跡があり、その左に『成島信遍集』と後人の手になる打付書がある。題簽にはどうあつたか知るすべもないが、『三代御点詠草にそへて奉しことは』(以下「奉しことは」と略称する)『為綱御御点』『為久御御点』『為村御御点』の各冒頭に掲げられた『三世のなみ』(『為久御御点』では『三世の波』)こそが本来の書名であることは、『奉しことは』の成島信遍自身の発言からも明らかであろう。

近世中期以降、江戸では幕臣を中心に冷泉門の堂上派歌人が多数輩出したが、中でも成島信遍は幕府の奥坊主を勤めながら和漢の学問に精励した当時の第一級の知識人であり、和歌に限って言えば、享保から宝暦にかけて冷泉為綱・為久・為村の三代の宗匠に師事して、江戸における冷泉門発展の基礎を築いた重要な存在であった。その信遍と冷泉家とのかかわりの一端を示す資料がこの『成島信遍集』である(本来の書名と目される『三世のなみ』を使用すべきであらうが、後述するように同名の別本が存するため、混同を避けてここでは『成島信遍集』と呼ぶことにする)。

「奉しことは」によれば、信遍が冷泉家に入門したのは享保四年のことであつたという。しかし、『寛政重修諸家譜』では享保五年、『事實文編』巻三十五所収「源信遍子陽伝」(入江南撰)では享保六年とまちまちである。『成島信遍集』が綱御御点の雑歌の最後の一首および「奉しことは」の記載から、為綱に入門したのは明らか

で、為綱が院使として下向した享保五年の入門とするのが一番考えやすく、信遍の記憶違いかとも考えられる。だが、何よりも本人の言葉であるから簡単に見すごすことはできないであろう。

為綱が享保七年に薨して後、その男為久を新宗匠に迎えた信遍は將軍吉宗の寵遇も背景に本格的に和漢の字才を発揮し始める。主なものだけでも享保十七年の曲水宴、元文二年の飛鳥山碑撰文、同五年の冷泉為久卿・葉室頼胤卿の隅田川遊覧の随行とはなほ新しい活躍ぶりである。又、冷泉為久との師弟関係は為綱・為村とのそれに比べてはるかに長く、密度の濃いものであった。「奉しことは」でも為久を「故殿」と呼び、為綱を「かの御おやにあたらせ給ふ」、為村を「おほんあてにあたらせ給ふ」と称するなど、為久を記述の中心にすえているのは明らかであり、点取歌の数を比較しても為久が他の二人を完全に圧倒していることからみても、信遍の歌学は為久によって確立されたといつてよからう。それだけに為久を失ったときの信遍の衝撃は大きかつたに相違なく、「奉しことは」でも途方に暮れた信遍の様子か修辞の勝った和文の向こう側に浮かび上がってくる。

為久の男為村は宗匠家を継ぐにあたって、信遍等先代の門人の扱いに気を遣った。「成島信遍集」一丁オの前書にある「百首はかり故大納言この御点の歌かきてまいらせよ」との門下に対する命は、為久の関東門人に対する影響力に鑑み、為久の点取歌を一覧することによりその指導ぶりを学ぶという目的にもとづいたものであったろう。江戸に根づいた冷泉門を更に発展させんとする新宗匠為村の熱意をそこに見てとることができる。「奉しことは」によれば、為村が宗匠家の点取の歌をさし出すよう命じたのは延享三年五月、為村の関東下向の際である（「惇信院殿御実紀」巻三では為村の下向は四月）。この時、冷泉門人二十六名が為村を迎えて当座の会を催し

てもおりの（石野政雄「近世堂上派随想」。「近世の學藝—史傳と考證—」所収）、新宗匠為村の関東における輝かしい第一歩を刻む記念すべき下向であった。為村の命に応じて信遍は為久卿御点の歌百五十五首を中心として為綱御点歌三十七首、為村御点歌二十七首を加えて二百十九首とし、「三世のなみ」と題して同年八月に冷泉家に奉った。その草稿を信遍の死後七年目に成島家でもとめ、信遍の孫勝雄の歌を付して成ったのが「成島信遍集」ということになる。近世後期の写しと思われるが、今のところ他の伝本は管見に入っていない。信遍の歌は石野広道の「霞閣集」や岡田常阿弥主権による「千首和歌」などにもいくらか見えるが、「成島信遍集」のほうがはるかに歌数は多く、しかも為久の批語も散見して、信遍の和歌を考える上で重要な資料となり得るであろう。もっとも成島信遍の伝に聞けるのは為綱入門の歌のみであつて、伝記資料としては価値はあまり高くない。しかし「奉しことは」や勝雄の識語の豊富な内容はこの欠を補つて余りある。

最後につけ加えておきたい。「成島信遍集」の本来の書名を「三世のなみ」とすべきであることを前に述べたが、普通「三世のなみ」（或いは「三代のなみ」といえば、養母の死を悼む長歌や春曙百首など）を収め、信遍の男和鼎の宝曆十一年十一月の奥書を有する歌集のほうを指す。内閣文庫や大阪市立大学森文庫の所蔵本がその系統に属する。従来、「三世のなみ」に関する言及がいくつかなされているが（「甲子夜話」巻百、「大日本歌書総覧」、「国書解題」など）、それらはすべて和鼎編集の「三世のなみ」についてである。「成島信遍集」と「三世のなみ」を比較するに、両書に共通する和歌は数えるほどであり、両書は全く内容を異にしている。それなのに在せ同一の書名を有するのか。この疑問に答えてくれるのが「三世のなみ」の和鼎奥書である（引用は内閣文庫本の本文による）。

